

茨城県
城里町

那珂西遺跡

平成17年9月

城里町教育委員会

茨城県
城里町

な か さい

那 珂 西 遺 跡

平成17年9月

城 里 町 教 育 委 員 会

序

那珂西遺跡は、那珂川の右岸の那珂西台地南部、標高39mのところに東西200m～400m、南北1200mに渡って存在し、古墳時代、奈良・平安時代の遺物が点在しています。

今回、この那珂西遺跡内に一般住宅が建築されることになり、建築の工法上この遺構に影響が及ぶ可能性があることが判明したため、建築主並びに（株）ジャパンプランニング様、（株）香陵住販様、（有）水成様の御理解と御協力により発掘調査を実施することができましたことに、感謝申し上げます。

この調査により、那珂西遺跡の概要の一部が判明いたしましたことは、那珂西地区の歴史はもとより城里町の歴史を解明する上でも大変貴重な資料とすることことができました。

文化財は、その地区の民俗・歴史・文化等を理解する上で欠くことができないものであり、特に埋蔵文化財は古代住居の生活様式を解き明かす貴重なものであります。

今回の発掘調査をもとに、本書が発行されましたことは、城里町の歴史・文化を知る上で大変意義深いことだと思います。今後はこの資料を広く活用され、郷土の姿を理解する一助にされますことを期待いたします。

最後になりますが、発掘調査にあたって御指導、御協力いただきました茨城県教育庁文化課並びに調査を担当されました（株）日本塗業史研究所の皆様、関係機関、関係者の皆様方に感謝申し上げまして、挨拶といたします。

平成17年9月

城里町教育委員会

教育長 三 村 亮 一

例　　言

- 1 本書は株式会社ジャパンプランニング、香陵住販株式会社、有限会社水成が実施する住宅建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は茨城県教育庁文化課、城里町教育委員会の指導により、上記3社から委託を受けた日本窯業史研究所が調査団を組織して、調査を行った。
- 3 本調査は平成17年5月13日～5月26日までを行い、調査面積は約137m²である。
- 4 調査年次及び組織

第1次試掘調査 平成14年7月26日（金）

担当者 小山映一（茨城県埋蔵文化財指導員・当時）

概要 3本の試掘溝により4軒の住居跡を確認

第2次試掘調査 平成17年3月3・4日

担当者 三輪孝幸（日本考古学协会会员　日本窯業史研究所主任研究員）

概要 本調査区の建物部分の3本の試掘溝によって2軒の住居跡を確認する。

本調査 平成17年5月13日～5月26日

調査指導 茨城県教育庁文化課

文化財保護主事（文化財担当） 飯島一生

茨城県埋蔵文化財指導員 川崎純徳

城里町教育委員会教育長 三村亮一

生涯学習課長 岩下 泉

主査兼係長 山口利春

主査兼係長 大曾根直美

主幹 佐藤正博

調査担当者 日本窯業史研究所代表 普間智代

調査部長 水野順敏

主任調査員 河野一也

調査員 河野真理子　中山哲也

調査参加者 渡邊　一　白沢国男

寺門富雄　高柳俊夫

- 5 本書の執筆ならびに編集は河野一也、河野真理子が行い、水野順敏が補訂した。遺構図面の整理、遺物実測、トレース及び遺物観察表は河野真理子、遺物写真の撮影は河野一也が行なった。
- 6 出土遺物及び図面、写真類は城里町教育委員会が保管する。

凡　　例

- 1 本遺跡での遺構は、住居跡をH.T.、土坑をC.D.の略号で表記した。
- 2 第1図は、国土地理院発行の「石塚」（縮尺2万5千分の1）を部分複製した。
- 3 遺構実測図の縮尺は $1/60$ 、遺物実測図の縮尺は $1/3$ とした。
- 4 写真図版の遺物番号は挿図の番号と一致する。

目 次

第1章 はじめに	
第1項 調査に至る経緯と経過	5
第2項 遺跡の位置と環境	5
第3項 周辺の遺跡	5
第4項 標準層序	9
第2章 遺構と遺物	
第1項 住居跡	
1号住居跡と出土遺物	9
2号住居跡と出土遺物	12
3号住居跡と出土遺物	20
第2項 土坑	
1号土坑	24
第3章 まとめ	24

挿 図 目 次

第1図 那珂西遺跡と周辺遺跡	第8図 2号住居跡出土遺物（1）
第2図 那珂西遺跡位置図	第9図 2号住居跡出土遺物（2）
第3図 標準層序	第10図 2号住居跡出土遺物（3）
第4図 那珂西遺跡全体図	第11図 3号住居跡
第5図 1号住居跡	第12図 3号住居跡出土遺物
第6図 1号住居跡出土遺物	第13図 1号土坑
第7図 2号住居跡	第14図 各住居跡出土の時期別組成

表 目 次

第1表 那珂西遺跡の周辺遺跡	第3-3表 2号住居跡出土遺物観察表（3）
第2-1表 1号住居跡出土遺物観察表（1）	第3-4表 2号住居跡出土遺物観察表（4）
第2-2表 1号住居跡出土遺物観察表（2）	第4-1表 3号住居跡出土遺物観察表（1）
第3-1表 2号住居跡出土遺物観察表（1）	第4-2表 3号住居跡出土遺物観察表（2）
第3-2表 2号住居跡出土遺物観察表（2）	第4-3表 3号住居跡出土遺物観察表（3）

図版目次

図版1

- A 那珂西遺跡遠景（西より）
- B 平面確認全景（南東より）
- C 1号住居跡全景（南より）
- D 1号住居跡柱穴と遺物出土状態（北西より）
- E 1号住居跡貼床状況（西より）
- F 2号住居跡平面確認全景（東より）
- G 2号住居跡全景（南より）
- H 2号住居跡カマド右側土層（南東より）

図版2

- A 2号住居跡南壁下出入口状段（北東より）
- B 2号住居跡カマド右側遺物出土状態（南より）
- C 2号住居跡・北東隅遺物出土状態（東より）
- D 2号住居跡貯蔵穴断面と坏（3）出土状態（東より）
- E 2号住居跡貼床状況（北東より）
- F 2号住居跡出入口貼床（北東より）
- G 3号住居跡平面確認全景（西より）
- H 3号住居跡全景（南より）

図版3

- A 3号住居跡全景（西より）
- B 3号住居跡カマド土層断面・遺物出土状態（南西より）
- C 3号住居跡壁下小穴・遺物出土状態（北より）
- D 3号住居跡遺物出土状態（西より）
- E 3号住居跡カマド全掘（西より）
- F 3号住居跡貼床状況（南より）
- G 1号土坑（北より）
- H 調査後全景（南東より）

図版4

1号住居跡出土遺物・2号住居跡出土遺物（1）

図版5

2号住居跡出土遺物（2）・3号住居跡出土遺物

第1章 はじめに

第1項 調査に至る経緯と経過

那珂西遺跡は茨城県東茨城郡城里町大字那珂西字塙に所在する。遺跡は那珂西遺跡（遺跡番号306-001）として登録され、古墳時代・奈良・平安時代の包蔵地としている。

当地内は平成14年に住宅造成が計画されたため、平成14年7月26日に試掘調査が行われた。A・B・Cの3本のトレチを設定し、地表下60～130cmの遺構確認面で4軒の住居跡を確認した。土師器片、須恵器片が出土し、奈良・平安時代の住居跡と推定されている。

その後、一般住宅の建築では遺構確認面まで影響が及ばないために宅地化が進んでいる。なお、今回は同所に建築される住宅の工法上地盤改良が必要とされ、造構に影響が及ぶ可能性が生じた。そのため、茨城県教育庁文化課・城里町教育委員会の指導により建物の範囲と浄化槽部分に限定し、改めて試掘調査を行うこととなった。調査は平成17年3月3・4日に実施し、建物部分に1・2号の丁字トレチ、浄化槽部分に3号トレチを設定し確認を行った。その結果、建物部分の東側にS I-1号住居跡、西側部分にS I-2号住居跡を確認した。S I-2号住居跡は平成14年7月の試掘調査でも確認されている。

試掘調査の結果に基づき、本調査を実施することとなり、平成17年4月27日に城里町教育委員会と本調査の打ち合わせを行い、5月13日から5月26日まで本調査を実施した。

第2項 遺跡の位置と環境（第1・2図）

本遺跡の所在する城里町は平成17年2月に常北町、桂村、七会村が合併し誕生した。北辺は新生常陸大宮市、東辺は新生那珂市と水戸市、南辺は笠間市、西辺は栃木県茂木町に隣接している。市街地からは国道123号線を南東方向に約3kmにある。

地理的には栃木県那須岳に源を発する那珂川が現常陸大宮市御前山地区で茨城県に入り、城里町の北東辺を南流し、約23kmでひたちなか市那珂湊の太平洋に至る。その那珂川西岸の河岸段丘上に那珂西遺跡がある。那珂川まで東方約2km、比高は約20mである。低地面は水田、段丘肩部から斜面は松・杉・檜が植林されている。遺跡のある台地上は畠地であるが宅地化が進んでいる。

那珂西遺跡は那珂西台地南端部の標高39mに位置し、宇都原・台海道東・兵庫坪・中城・塙を含み、東西200～400m、南北1200mの広大な範囲である。本調査区は遺跡北端の塙地区の一部である。南端には上界を残した那珂西城跡があり、本城の中に宝幢院が所在する。

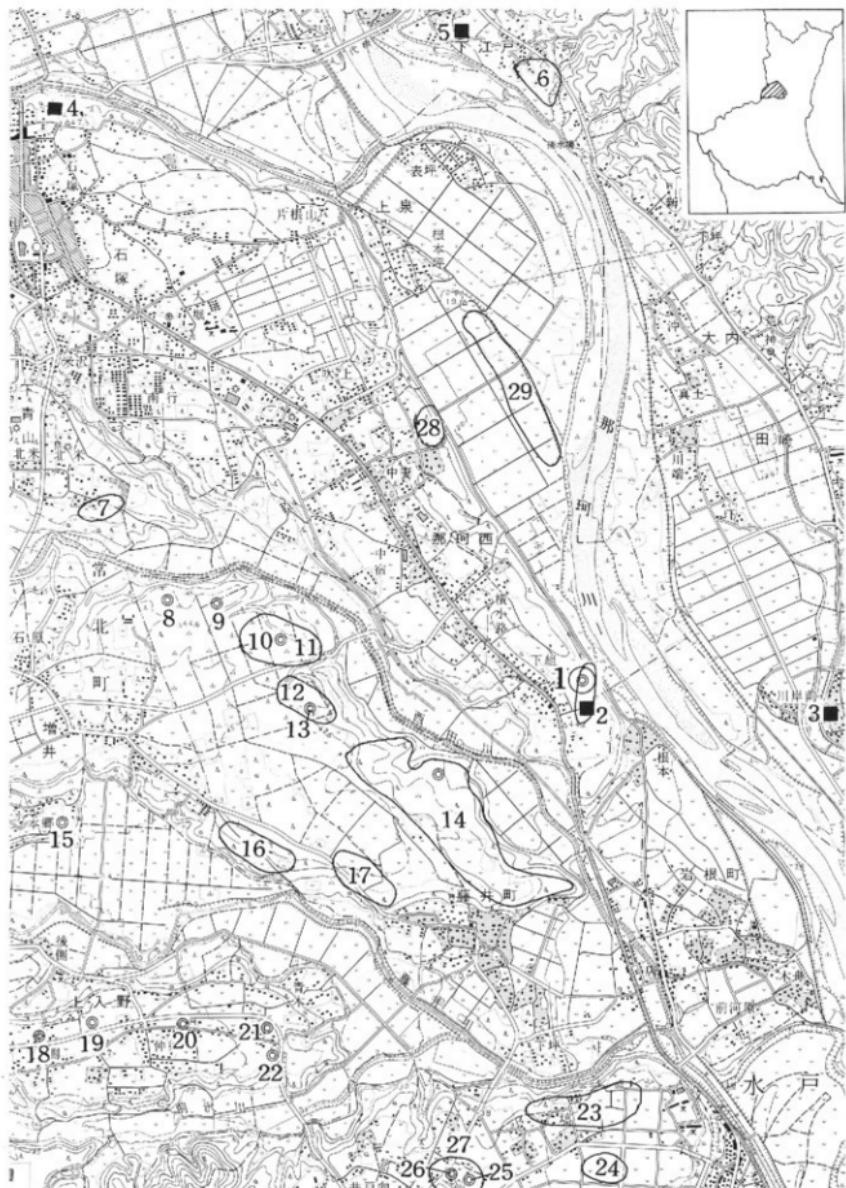
第3項 周辺の遺跡（第1図、第1表）

本遺跡を含めて周辺には縄文時代から弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代まで多くの遺跡が存在するが、本調査では縄文土器は出土していないので、弥生時代からとした。

那珂西遺跡の周辺遺跡を公刊されている資料をもとに、出土遺物から時代の継続性を考えてみる。

弥生時代の遺跡は（8）のポンポン遺跡のみである。

弥生時代から古墳・奈良・平安時代まで継続する集落は（9）のドウゼンクボ遺跡、（10）の二の沢遺跡、（12）のニガサワ遺跡、（22）の上入野遺跡である。（14）の十万原遺跡は鎌倉・室町時代まで継続している。（11）の二の沢古墳群、（13）のニガサワ古墳群はそれぞれ（12）・（13）の集落との関連で捉えることができる。古墳



第1図 那珂西遺跡と周辺遺跡

時代の集落（27）の鳴沢町大塚遺跡は（25）の鳴沢町大塚古墳群と相關関係が有るが継続性がないところに意味がある。

古墳時代から奈良時代まで継続する集落は（1）の那珂西遺跡、（15）の増井本郷遺跡、（16）の南駒形遺跡、（17）の清水台遺跡、（19）の後側遺跡、（20）の仲郷遺跡、（21）の青木遺跡、（23）の塙遺跡、（29）の外之内・天神遺跡である。

奈良・平安時代の集落は（7）の北米遺跡、（18）の前側遺跡、（28）の中妻遺跡があり、この一群も歴史的に意味がある。

鎌倉・室町時代は（2）の那珂西城跡、（3）の戸村城跡、（4）の石塚城跡、（5）の江戸城跡、（24）の神生館跡等の城館跡と前時代から継続する（14）の十万原遺跡、（20）の仲郷遺跡、（21）の青木遺跡の居宅集落がある。

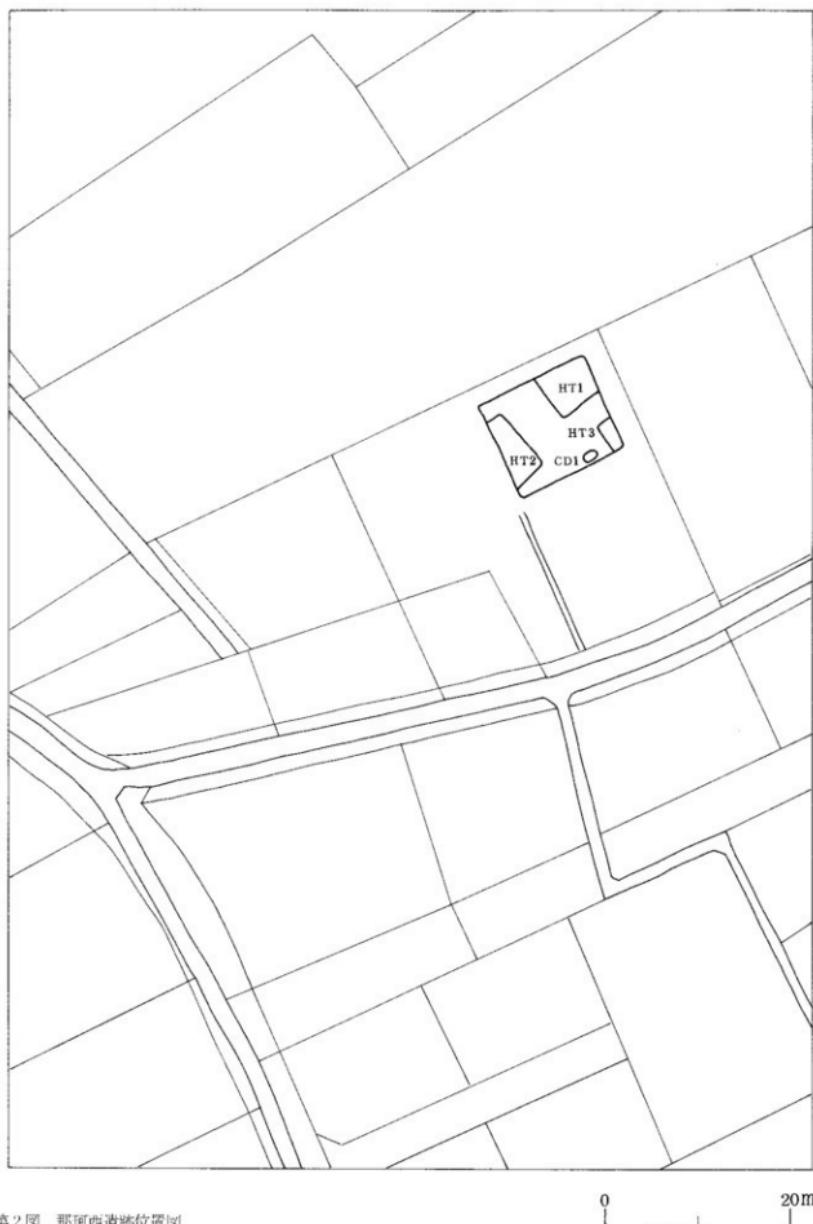
採集資料との制約はあるが、これらの集落の古墳・奈良・平安時代と継続する（9）・（10）・（12）・（14）・（22）・（29）の遺跡は一定の面積をもっているようである。さらに古墳時代から始まる（29）は（10）・（12）から、（15）・（16）・（17）は（14）から、（19）・（20）・（21）は（22）から、（23）は（26）から分派した可能性がある。（29）のように合流したものもあるが、他の遺跡はある一定の距離を以って配置している。

奈良時代から出現する集落も同じく母体とする（29）から（28）へ、（10）から（7）へ、（22）から（18）へ分派していったのではないかと思われる。本遺跡も（14）からの分派の可能性がある。

鎌倉・室町時代の城館跡については、那珂川沿い段丘上にある（2）・（3）・（5）と、平地にある（4）は城郭と居館と別けて考えるべきであろう。

番号	遺跡名	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
1	那珂西遺跡			○		
2	那珂西城跡			○	○	○
3	戸村城跡			○	○	○
4	石塚城跡			○	○	○
5	江戸城跡			○	○	○
6	下江戸城跡					
7	北米遺跡			○		
8	ポンポン遺跡	○				
9	ドウゼンクボ遺跡	○	○	○		
10	二の沢遺跡	○	○	○		
11	二の沢古墳群		○			
12	ニガサワ遺跡	○	○	○		
13	ニガサワ古墳群		○			
14	十万原遺跡	○	○	○	○	
15	増井本郷遺跡		○	○		
16	南駒形遺跡		○	○		
17	清水台遺跡		○	○		
18	前側遺跡			○		
19	後側遺跡		○	○		
20	仲郷遺跡		○	○	○	
21	青木遺跡		○	○	○	○
22	上入野遺跡	○	○	○		
23	塙遺跡		○	○		
24	神生館跡				○	○
25	鳴沢町大塚古墳群		○			
26	飯富遺跡	○	○	○		
27	鳴沢町大塚遺跡		○			
28	中妻遺跡			○		
29	外之内・天神遺跡		○	○		

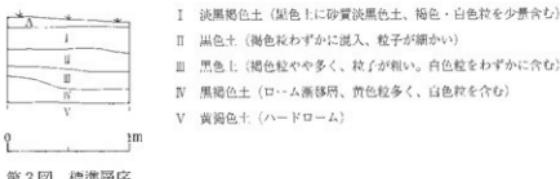
第1表 那珂西遺跡の周辺遺跡



第2図 那珂西遺跡位置図

第4項 標準層序

現地表面からローム層上面までは約70~100cmで、第3図は調査区東側の1号住居跡と3号住居跡の間の標準層序である。A層はいわゆる整地層で砂層。標準層序はI・II・III・IV層で住居跡の掘り込み面はII層の上層にあると考えられる。



第3図 標準層序

第2章 遺構と遺物

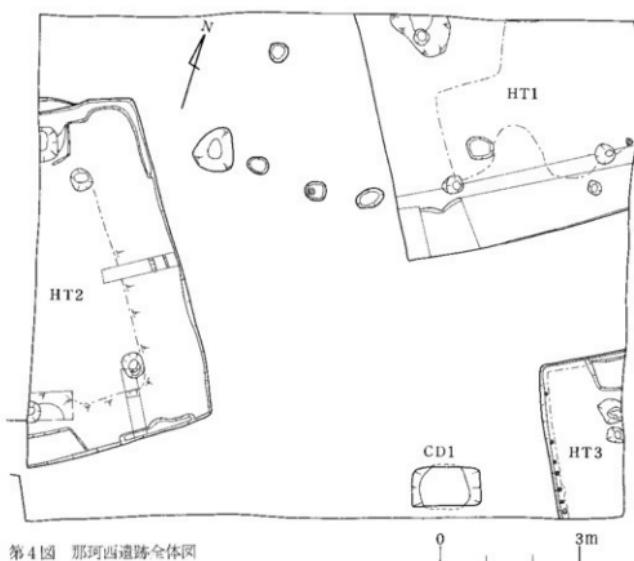
本調査では住居跡3軒と土坑1口を確認したが第4図に示す如く住居跡はいずれも部分的な調査に止まる。

第1項 住居跡

1号住居跡と出土遺物

遺構（第5図、図版1）

1号住居跡は調査区北東隅に位置し、南辺、西辺と東辺の一部を確認し、他は調査区外にある。住居の床面は造構確認面のローム層上面にあるため中央から北東辺は失われていたが、住居の掘方と貼床の遺存から平面形を確認出来た。



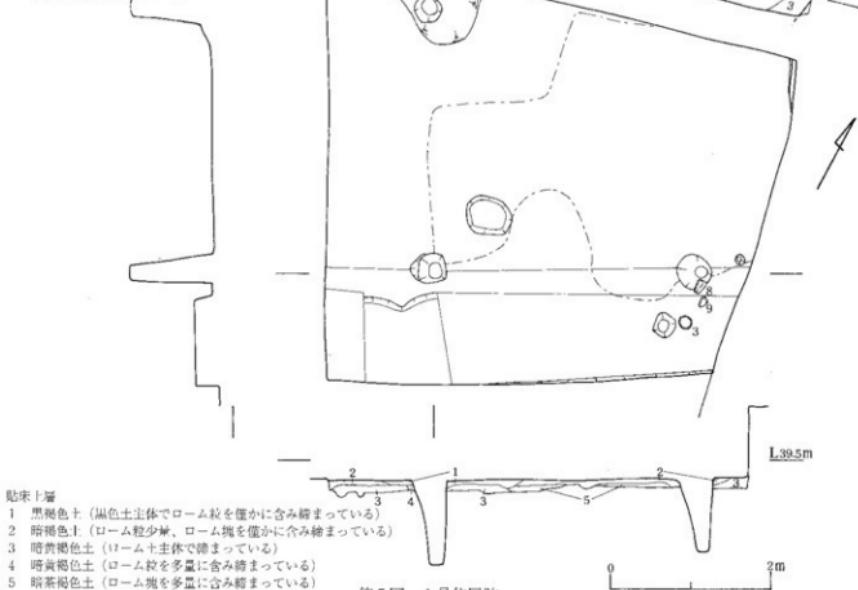
第4図 那河西遺跡全体図

住居の平面形は東西5.78m、南北5.4m以上の方形と思われる。主軸方位はN-27°30'-Wである。壁の立ち上りは南辺の東側で2cmである。残存部分の床は固く締まっていた。貼床はロームブロックを主体に黒色土を混入し固く締まり、住居中央部はローム層を直に、柱穴より外周は溝状にしているものと思われる。北東の柱穴は調査区外にあるが他の3口を確認した。北西の柱穴は造成の為の抜痕により床面から擾乱を受けている。

平面は約40×40cmの不整形で、深さは約60~70cm、柱当りは黒く固く縮まっていた。カマドは北辺にあると思われるが調査区外である。

住居内土層

- A 整地層（山砂）
- B 垢施による抜根
- 1 黒色土（やや軟らかく、ローム粒を少量含む）
- 2 黑褐色土（やや縮まりがあり、ローム粒や多く、下部にはローム塊を含む）
- 3 黑褐色土（堅厚、床直のため、ローム粒、ローム塊を多量に含む）



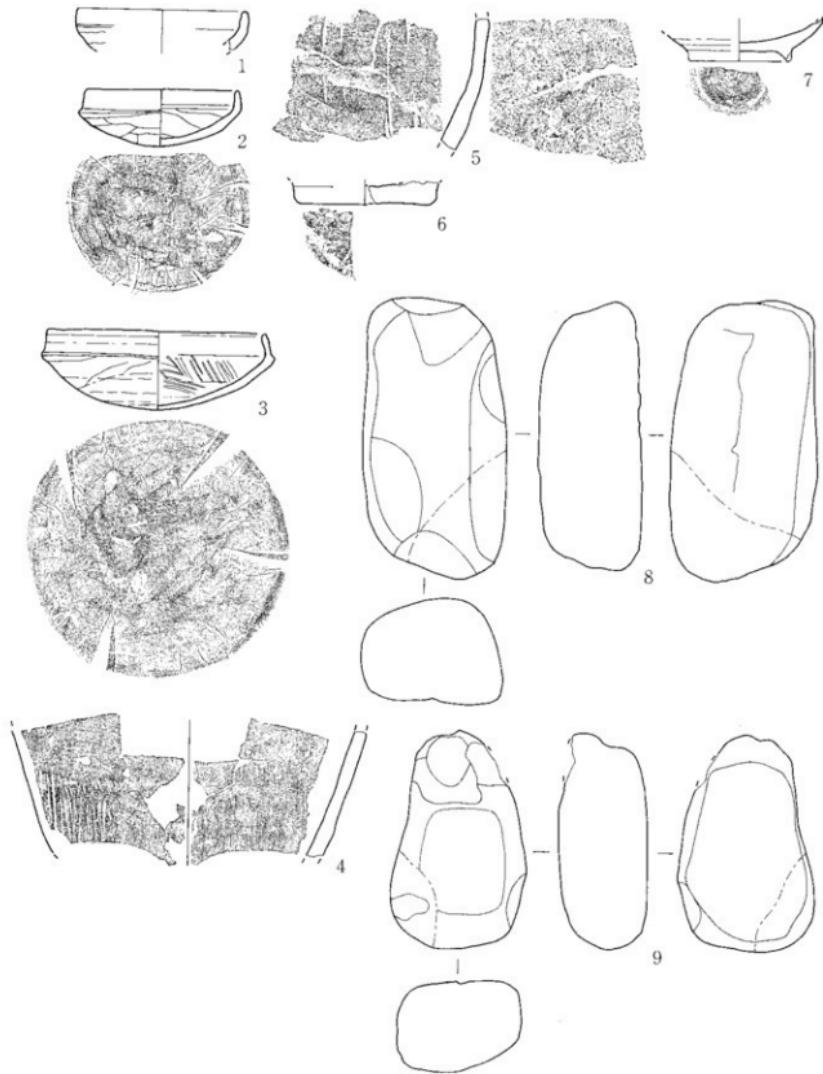
第5図 1号住居跡

遺物（第6図、第2-1・2表、図版4）

遺物は南東隅柱穴から南へ30cmの床面直上で略完形の土師器壺（3）が出土した。また埋積土中の遺物としたが、ほとんど床面に近いと思われる土師器壺（2）、外面を磨き黑色処理した土師器の瓶（4）などが出土している。また同じく南東隅柱穴の南に砥石状に使用痕のある石が2点（8・9）出土している。

遺物番号	種別 器種	寸法 口径 器高・底径	胎土・焼成・色調	形状・技法などの特徴	出土位置 備考
1号住.1	土師器 壺	口径(10.3) 器高一 底径一	胎土 赤色微粒子、微砂粒 含む 焼成 良 色調 内外 黒茶褐色	体部外面上位に棱があり、口辺 が直立て立ち上がる。外向は 口辺部ヨコナデ、体部がヘラミ ガキ。口辺部内面は横方向のヘ ラミガキ。内外面漆塗り。	埋土中 小片

第2-1表 1号住居跡出土遺物（1）



第6図 1号住居跡出土遺物 (1/3)

遺物番号	種別 器 形	寸法 口径 器高・ 底径	胎土・焼成・色調	形状・技法などの特徴	出土位置 備考
1号作 2	土師器 壺	口径 9.4 器高 3.5 底径 丸底	胎土 茶色の粒少量、 白色・雲母の微粒子 含む 焼成 良 色調 内 暗褐色 外 暗茶褐色 部分的に鉄錆色	体部外面上位に棱があり、口辺が 直立して立ち上がり、棱の有るところと無いところがある。外面 は口辺部ヨコナデ、体部上半が横 方向のヘラミガキ、下半が一方 のヘラミガキ。 内面はハラナデ。内外面塗り。	埋土中 口辺～体部 約欠
3	土師器 壺	口径 13.5 器高 4.9 底径 丸底	胎土 微砂粒、白色粒少し 含む 焼成 良 色調 内外 灰茶褐色 暗茶褐色 内外面とも一部黒 くなっている	体部外面上位に棱があり、口辺が 内側に屈曲して立ち上がる。棱には は強いところと弱いところがある。 内面のミガキは3単位で、工具は 幅が狭い。 外面は体部上半が3単位のヘラ削 り後底部を一方のナデ仕上げ。 口辺部外面ヨコナデ。内外面塗 り。	床面直上 口辺部 約欠
4	土師器 瓶	口径 — 器高 — 底径 —	胎土 白色微粒、微砂粒 含む 焼成 良 色調 内 暗黒茶褐色 外 暗茶褐色 断面 明褐色	外面は上位が横方向のヘラナデ、 下位が縱方向のクシ口。 内面は縱方向のヘラミガキ。 内外面塗り。	埋土中 体部小片
5	土師器 甕	口径 — 器高 — 底径 —	胎土 小石、微砂粒を多く 含む 焼成 良 色調 内 外 茶褐色 茶褐色で部分的に 黒く焼けている	内面は横方向の幅広のヘラナデ。	埋土中 体部小片
6	土師器 甕	口径 — 器高 — 底径 (8.5)	胎土 小石、細砂粒、雲母を 多く含む 焼成 良 色調 内外 明茶褐色		埋土中 底部小片
7	土師器 高台付壺	口径 — 器高 — 高台径 (6.3)	胎土 微砂粒含む 焼成 良 色調 内 黒色(黒色処理) 外 茶褐色	ロクロ土師器。 内面黒色処理で底部は回転ヘラ削 り。	試掘2トレ 小片
8	石製品	長 (17.4) 幅 (8.5) 厚 (6.3)	疊岩 黒褐色で一部焼けている。	上下端、両側面下半、表面に擦れ た使用痕がある。	南東柱穴南
9	石製品	長 (13.4) 幅 (8.5) 厚 (5.5)	砂岩 淡茶褐色で広端・側面下半が 焼けている	分型型で表面に滑沢な使用痕があ る。	南東柱穴南

第2-2表 1号住居跡出土遺物 (2)

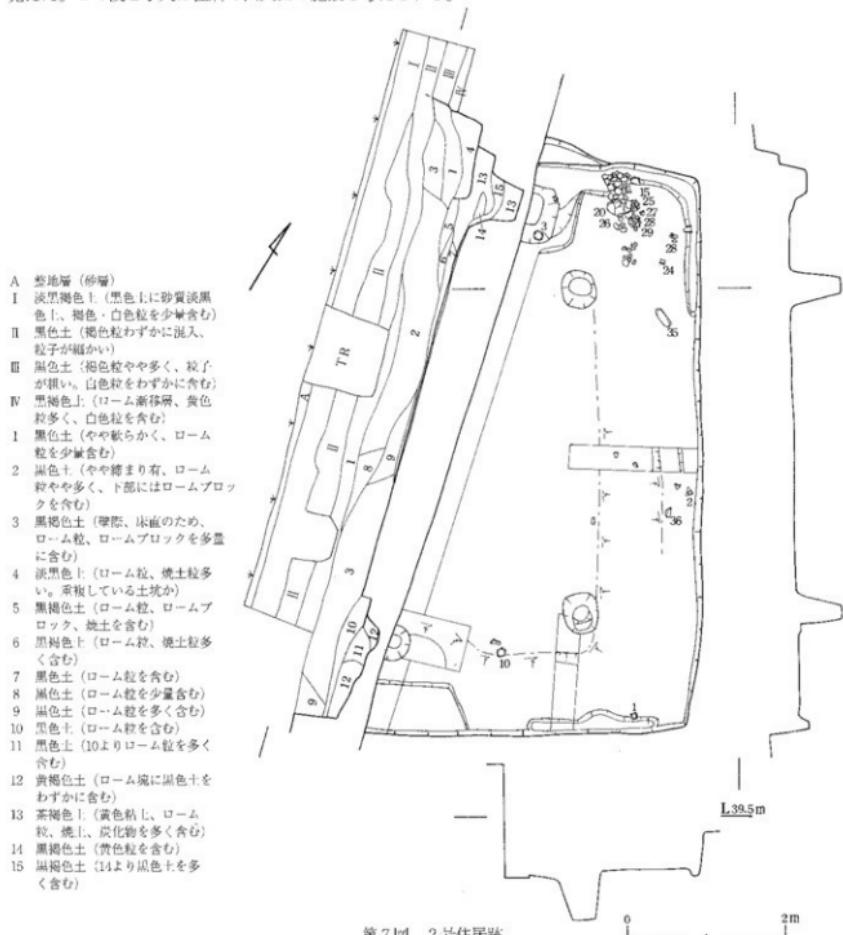
2号住居跡と出土遺物

遺構 (第7図、図版1・2)

本住居跡は調査区西端に東半分を確認し、西半分は調査区外である。

住居の平面形は南北7.25m、東西4.1m以上の方形と思われる。主軸方位はN-32°-Wである。壁は外傾して立ち上り、壁高は45~50cmである。床面はローム層を50cm程掘下げて構築し、柱穴より内側はローム面を直接床にしている。外側は25cm程掘下げ、ロームブロックで埋め戻して床としていた。また、梁下は幅約20cm、深さ10cm程掘下げ、埋め戻していた。壁溝状の溝は北東隅と南壁下に見られるが、生活時は床となっていたと思われる。柱穴は北東・南東の2口を確認した。平面は50×45cmの隅丸方形で深さは約60cmである。カマドは北壁中央に想定されるが調査区外である。しかし、北壁に貯蔵穴が半分確認され、カマドの右側に位置すると推定される。規模は南北上端で75cm、下端で40cm、東西は35cm以上、深さは約60cmである。肩部から土師器壺(3)が出土している。また、北壁には住居跡を切っている遺構があり、住居跡に近い時期と思われるが性格は不明である。南壁下には平面台形の段がある。南北幅55cm、東西幅は壁下で130cm以上、住居内で90cm以上、高さは約10cmである。

その北側には径50cmの円形の小穴がある。土層断面を観察すると當時床ではなく、何度も掘り返しているように見えた。この段と小穴は住居の出入口の施設と考えられる。



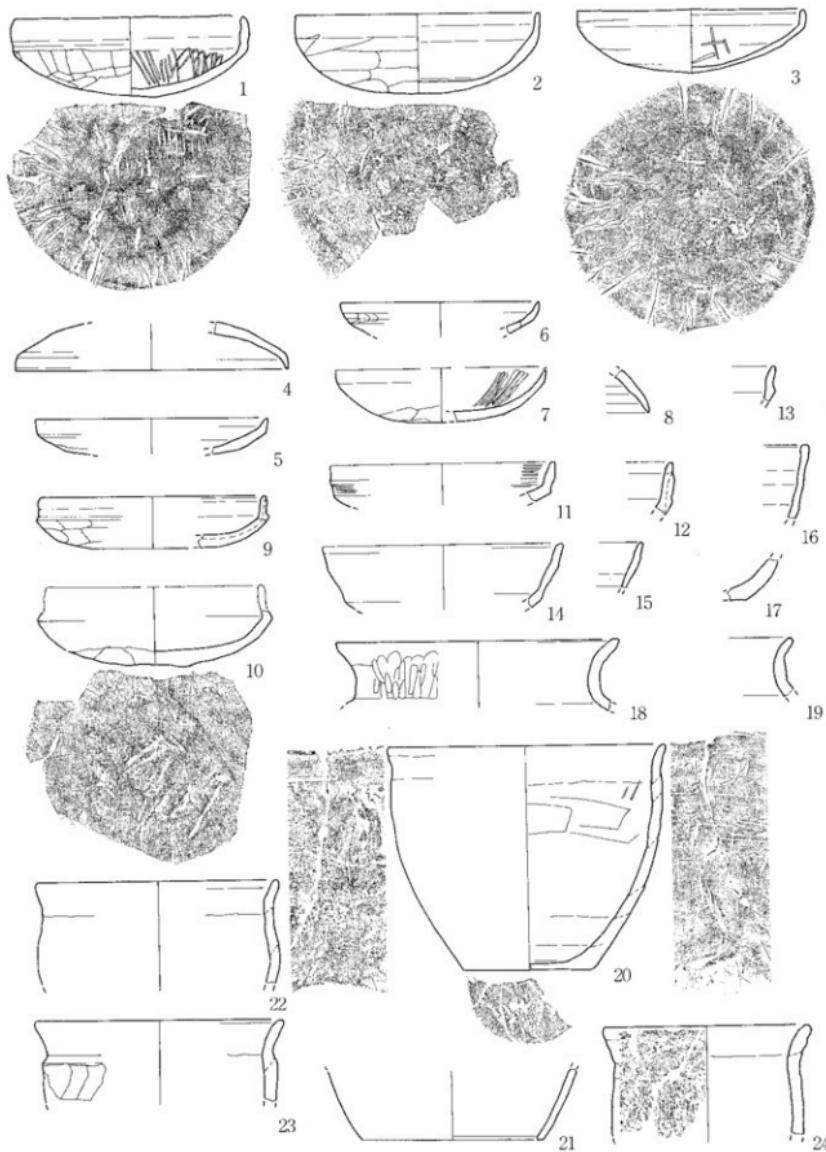
第7図 2号住居跡

遺物 (第8~10図、第3-1~4表、図版4・5)

遺物は北東隅から多く出土している。東壁側、南壁側からも出土しているが、すべて柱穴より外側である。北東隅からまとまって出土した遺物は、土師器壺形の鉢(20)と(25)、(27)~(29)の上師器壺の4個体に復原できた。また周辺の土師器も壺の破片で(25)、(27)~(29)と接合した。(3)は土師器壺の完形品である。北東隅の土師器はカマドに使用されていたものか構築材であったものと思われる。(33)~(36)は使用痕のある石である。

遺物番号	種別 器種	寸法 口径・高さ 器高・底径	胎土・焼成・色調	形状・技法などの特徴	出土位置 備考
2号住1	土師器 壺	口径 14.3 器高 4.9 底径 丸底	胎土 茶色の粒子、細砂粒 多く含む 焼成 良 色調 内 明茶褐色 外 暗茶褐色で部分的に黒色	外面は口辺がヨコナデ、体部は3単位のヘラ削りで、硬くなつてから削っているためかミガキのように見える。底部は一方角のヘラ削りであるが硬かつたせいかガタガタになっている。内面は全面が棒状のヘラミガキで、内外面とも漆を塗っている。	カマド東の床直 口辺彫欠
2	土師器 壺	口径 15.2 器高 5.0 底径 丸底	胎土 粗砂粒、細砂粒多く含む 焼成 良 色調 内外 こげ茶褐色 底部 黒色	外面は口辺がヨコナデ、体部が3単位のヘラ削り後、底部を一方向のヘラ削り。内面はヨコナデで内外面とも漆を塗っている。	体部～口辺彫欠 10の蓋か？
3	土師器 壺	口径 14.2 器高 3.9 底径 丸底	胎土 小石、粗砂粒、鐵砂粒多く含む 銀雲母 焼成 良 色調 内 黒色で肩りが一部暗茶褐色 外 暗茶褐色で部分的に黒色	外面は口辺がヨコナデ、体部がヘラナデ。内面はヨコナデで一部棒状のミガキ。内外面とも漆を塗っている。	貯藏穴肩部 暗尖形 蓋の可能性有。
4	土師器 蓋	口径 (16.8) 器高 —	胎土 白色粒、金雲母、微砂粒多く含む 焼成 良 色調 中 天 暗茶褐色 下 こげ茶褐色 内 暗茶褐色 口辺に墨く付着	甲部は3単位のヘラナデ、口辺部はヨコナデ。内面はヨコナデ。内外面とも漆塗り。	埋土下層 小片
5	土師器 皿	口径 (14.4) 器高 —	胎土 粗砂粒、微砂粒含む 焼成 良 色調 内外 明茶褐色	外面は口辺がヨコナデ、体部はヘラナデ。内面はヨコナデ。醸化焼成。	埋土下層 小片
6	土師器 皿	口径 (12.5) 器高 — 底径 —	胎土 微砂粒、金雲母を多く含む。キラキラしている。 焼成 良 色調 内 暗茶褐色 外 暗茶褐色で一部黒色	外面は口辺がヨコナデ、体部上位がヘラナデ、下位がヘラ削り。内面はヨコナデ。内外面とも漆塗り。	埋土下層 小片
7	土師器 壺	口径 (13.2) 器高 (3.4) 底径 —	胎土 粗砂粒、微砂粒多く含む 焼成 良 色調 内 暗茶褐色 外 上半 黑褐色 下半 茶褐色	外面は口辺と体部上半が横方向のミガキ、体部下半がヘラミガキ、底部がヘラ削り。内面はヘラミガキ。内外面とも漆塗り。	埋土上層 小片
8	土師器 蓋	口径 (13.2) 器高 —	胎土 細砂粒、雲母含む 焼成 良 色調 内外 赤茶褐色	外面口辺部と内面はヨコナデ。甲の上位は横方向のヘラ削り。醸化焼成	カマド東の床直 小片
9	土師器 壺	口径 (14.5) 器高 (3.2) 底径 —	胎土 細砂粒、微砂粒含む 焼成 良 色調 内 黑茶褐色 外 口辺が黒色、体部は明茶褐色で部分的にこげ茶色	外面は口辺がヨコナデ、体部は3単位のヘラナデ。内面はヨコナデ。内外面ともに漆塗りであるが、とくに外面は漆がとんでいる。	埋土中層 小片

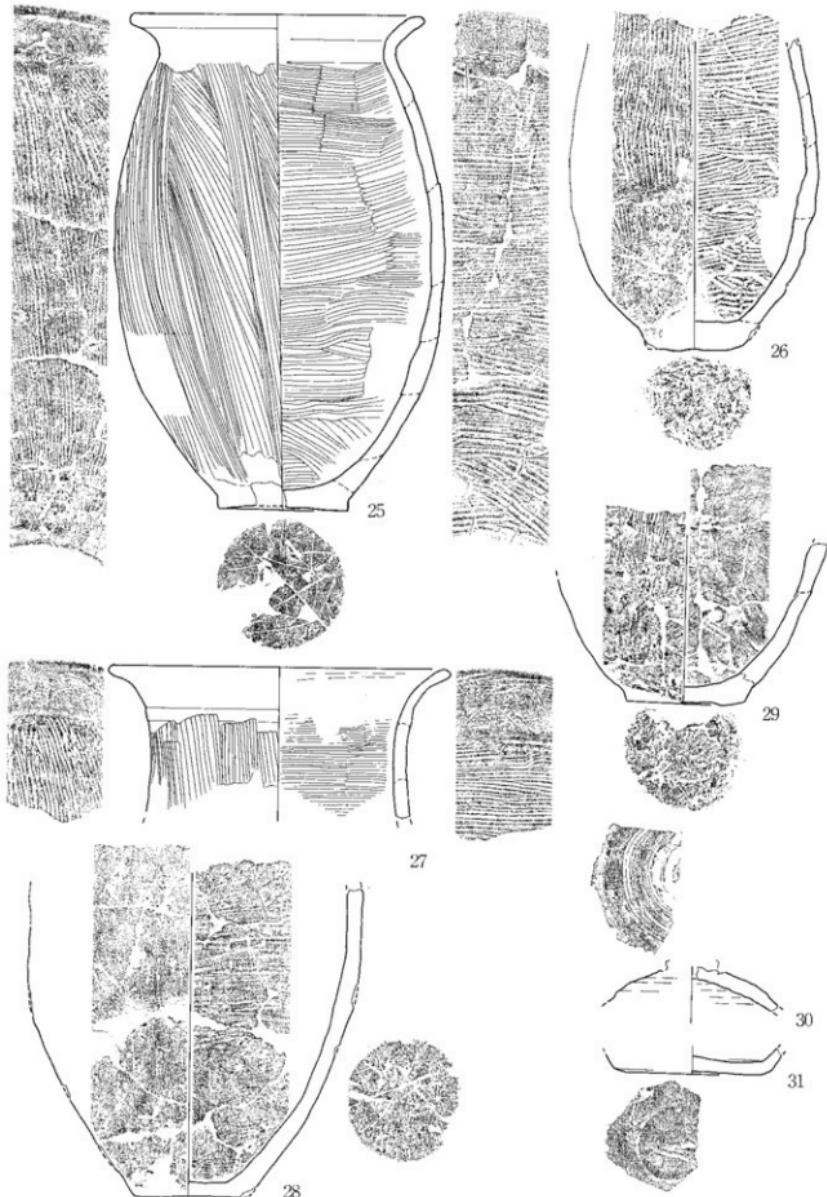
第3-1表 2号住居跡出土遺物 (1)



第8図 2号住居跡出土遺物（1）

遺物番号	種別 器	寸法 器高・底径	口径 器高・底径	胎土・焼成・色調	形状・技法などの特徴	出土位置 備考	
2号住 10	土師器 壺	口径 (13.3) 器高 (4.9) 底径 丸底	胎土 燒成 色調 良	茶色の粒子、白色粒子、 微砂粒多く含む 内 こげ茶褐色 外 黒く煤けている	外面は体部上半がヨコナデ、下半 が横方向のヘラ削り。 内面はナデで、内外面に漆を塗っ ている。	口辺部欠 2の身か?	
11	土師器 壺	口径 (14.0) 器高 底径	胎土 焼成 色調 良	胎土 燒成 色調 内 黒色(黒色処理) 外 口辺は黒色で体 部が一部褐色	外面は口辺下位がミガキ。内面は ミガキ。内外面黒色処理。	埋土中層 小片	
12	土師器 壺	口径 器高 底径	— — —	胎土 燒成 色調 良	白色粒、微砂粒含む 内 黒色(黒色処理) 外 茶褐色	口辺内外面ヘラミガキ。 内面黒色処理。外面酸化焰焼成。	カマド東 床直 小片
13	土師器 壺	口径 器高 底径	— — —	胎土 燒成 色調 良	細砂粒を多く含む 内 外 こげ茶色で部分 的に黒色	口辺内外面ヨコナデ。 内外面漆塗り。	埋土下層 小片
14	土師器 壺	口径 (14.5) 器高 底径	— — —	胎土 燒成 色調 良	小石、粗砂粒含む 内 明褐色 外 明褐色で口辺部 に煤付着	内面ヨコナデ。 酸化焰焼成	埋土中層 小片 二次火熱を 受けている
15	土師器 壺	口径 器高 底径	— — —	胎土 燒成 色調 良	胎土 燒成 色調 内 黒色(黒色処理) 外 灰褐色	外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。 内面黒色処理。外面酸化焰焼成。	25の下床直 口辺部小片
16	土師器 壺	口径 器高 底径	— — —	胎土 燒成 色調 良	胎土 燒成 色調 内 黒色(黒色処理) 外 口辺部が黒色 体部が明褐色	ロクロ土師器 外面は口辺部ヨコナデ。口縁と内 面はヘラミガキ。 内面黒色処理。外面酸化焰焼成。	試掘 1 トレ 2 住 小片
17	土師器 壺	口径 器高 底径	— — —	胎土 燒成 色調 良	胎土 燒成 色調 内 黒色(黒色処理) 外 黑褐色	外面ヘラ削り。 内面ヘラミガキ。 内面黒色処理。外面酸化焰焼成。	床下 体部下位小 片
18	土師器 壺	口径 (17.6) 器高 底径	— — —	胎土 燒成 色調 良	胎土 燒成 色調 内 暗赤褐色で頭部が こげ茶褐色 外 暗赤褐色	外面腹部ヨコナデ後瓶方向のヘラ ミガキ。内面は口辺部が横方向の ヘラミガキ、屈曲部がヨコナデ。	埋土上層 口辺部小片
19	土師器 小甕	口径 器高 底径	— — —	胎土 燒成 色調 良	細砂粒、微砂粒、 小石(2~3mm大)含む。 内 口辺部 黒色 頭部 暗赤茶褐色 外 暗赤茶褐色	内外面ヨコナデ。	埋土上層 口辺部小片
20	土師器 鉢	口径 (17.0) 器高 (14.0) 底径 (8.1)	胎土 燒成 色調 良	胎土 燒成 色調 内 明茶褐色 外 明茶褐色で体部下 位が一部黒色	口辺部内外面ヨコナデ。外面が縱 方向のヘラ削り、内面が横方向の ヘラナデ。胎土に小石を多く含み、 器肌がじけている。	1/2残存	
21	土師器 甕	口径 器高 底径	— — —	胎土 燒成 色調 良	細砂粒、微砂粒、茶色 の粒子含む 明赤茶褐色	無底式 外面ヘラ削り後ナデ。内面はヘラ ナデ。	埋土中層 底部小片

第3-2表 2号住居跡出土遺物 (2)



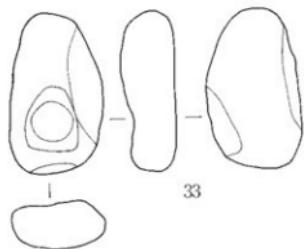
第9図 2号住居跡出土遺物（2）

遺物番号	種別 器	寸法 器高・底径	口徑 口径 (14.9) 器高 底径	胎土・焼成・色調 胎土 小石(2~4mm大)赤色 粒、 細砂粒、微砂粒含 む。 銀毫母少し含む。 焼成 良 色調 内 暗褐色 外 明褐色	形状・技法などの特徴 口辺部外面ヨコナデ。外面体部 が横方向のヘラ削り。	出土位置 備考 埋土下層 小片
2 号住 22	土師器 小甕		口径 (14.9) 器高 底径	胎土 小石(2~4mm大)赤色 粒、 細砂粒、微砂粒含 む。 銀毫母少し含む。 焼成 良 色調 内 暗褐色 外 明褐色	口辺部外面ヨコナデ。外面体部 が横方向のヘラ削り。	埋土下層 小片
23	土師器 小甕		口径 (15.5) 器高 底径	胎土 小石(2~4mm大)、粗砂 粒、微砂粒含む。 焼成 良 色調 内 口辺 明茶褐色 体部 黑褐色 外 赤茶褐色	口辺部外面ヨコナデ。体部外面 が横方向のヘラ削り。	埋土中層 小片
24	土師器 小甕		口径 (12.6) 器高 底径	胎土 小石(6~10mm大)、粗 砂粒を非常に多く含む 焼成 良 色調 内 暗こげ茶褐色で 部分的に黑色 外 赤褐色	口辺部外面と内面はヨコナデ。 体部外面はクシ目。 二次的に火熱を受け、外面はボロ ボロで脆い。	カマド東 床直 小片
25	土師器 甕	口径 18.0 器高 30.7 最大径 20.7 底径 8.1		胎土 白色石英粒(1~3mm大) を多く含み、砂質 焼成 良 色調 内 茶褐色 外 茶褐色から黒褐色 煤付着	粘土繊維積み2段作り。 外面は口辺部がクシ目後ヨコナ デ、体部が縱方向のクシ目。 内面は口辺部がクシ目後ヨコナ デ、体部が横方向のクシ目(17本) で、外向で使用のクシは内面使用 のものより細い。 底部に木葉痕有。	カマド東 床直 少残存
26	土師器 甕		口径 器高 底径 6.0	胎土 白色石英粒(1~5mm大)、 粗砂粒を多く含む。 焼成 良 色調 内 茶褐色 外 暗赤褐色と黒色半 分。二次的に火を受 けている。	粘土繊維作り 外面は縦方向のクシ目(3mm幅で 9~10本)。内面は横方向のクシ 目(3cm幅で10本)。	カマド東 床直 底部~体部 少残存
27	土師器 甕		口径 21.3 器高 底径	胎土 白色石英粒(1~3mm大) を多く含む。 焼成 良 色調 内 薄茶色 口辺部 赤褐色 外 淡褐色	粘土繊維作り。外面は体部がクシ 目、口辺がクシ目後ヨコナデ。内 面は横方向のクシ目後口辺部ヨコ ナデでクシ目が残る。	カマド東 床直 口辺~体部 少残存
28	土師器 甕		口径 器高 底径 7.2	胎土 白色石英粒(1~7mm大)、 小石を多く含む。 焼成 良 色調 内 茶褐色 外 こげ茶褐色 半分 二次的に火を受 けて赤褐色	粘土繊維作り 外面は縦方向のヘラ削り。内面は 板状工具によるナデで、部分的に クシ目。底部にヘラ記号?	カマド東 床直 底部~体部 少残存
29	土師器 甕		口径 器高 底径 7.4	胎土 小石(1~10mm大)多く 含む。 焼成 良 色調 内 淡茶褐色 外 茶褐色 部分的に 火を受けて、赤茶 っぽい部分と真黒 に煤けた部分が有 る	外面は縦方向のクシ目。 内面は横方向のヘラナデ。	カマド東 床直 底部~体部 下位少残存

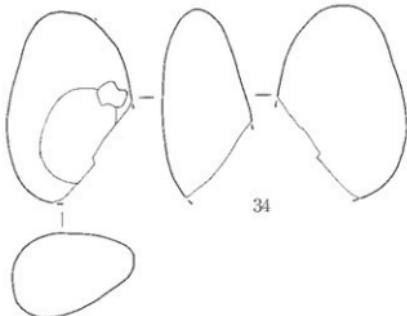
第3-3表 2号住居跡出土遺物 (3)



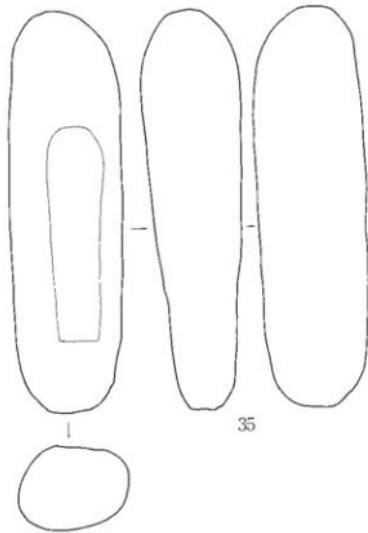
32



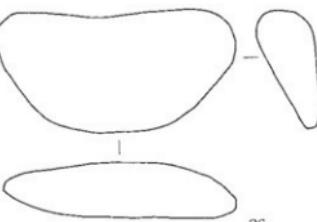
33



34



35



36

第10圖 2号住居跡出土遺物（3）

遺物番号	種別 器種	寸法 口径 器高・底径	胎土・焼成・色調	形状・技法などの特徴	出土位置 備考
2号住30	須恵器 蓋	口径 器高 底径	胎土：白色粒子、微砂粒多く含む 焼成：良 色調：暗灰色	「八」のヘラ書き文様有り。 益子産原東窯か。	埋土上層 甲の小片
31	須恵器 环	口径 器高 底径 (9.5)	胎土：白い小石(1~3mm大) 微砂粒含む 焼成：良 色調：暗灰色	底部 ヘラ起し。	埋土 底部 ^{1/3}
32	須恵器 壺	口径 器高 底径	胎土：白色粒、微砂粒含む 焼成：良 色調：暗灰色	外面は口辺部がヘラナデ、肩部に格子叩き。内面は口辺部上位がヨコナデ、下位がヘラナデ。肩部に青海波の当具痕有。	埋土下層 小片
33	石製品	長 幅 厚 (15.3) (7.5) (3.4)	砂岩 表面下半が窪んでいる。	両側端と下端に使用痕有。	
34	石製品	長 幅 厚 (11.8) (7.9) (5.6)	砂岩	分銅型で表面に使用痕がある。	埋土 ^{1/4} 欠
35	石製品	長 幅 厚 (25.1) (6.9) (5.2)	砂岩 棒状で上方から下方に向けて薄くなっている。	上面には良く擦れた痕と上下端には叩きの使用痕がある。	
36	石製品	長 幅 厚 (11.8) (7.9) (5.6)	隅丸の逆台形状で断面は下端に向かって斜めになっている。	上面に条線状の使用痕有。	

第3-4表 2号住居跡出土遺物(4)

3号住居跡と出土遺物

遺構(第11図、図版2・3)

3号住居跡は調査区南東隅に確認したもので試掘調査では確認できなかった。東半分と南辺は調査区外にある。

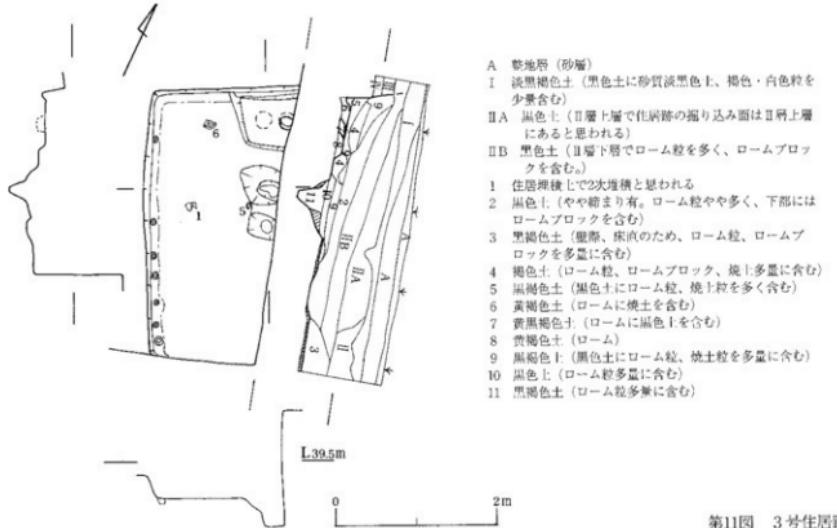
住居の平面形は東西185m以上、南北は住居の上端では解らないが、下端では南西隅と推定されることから推定35m程の方形であろう。主軸方位はN-25°-Wである。壁は外傾して立ち上り、壁高は約30cmである。壁下には径5~6cmの小穴が配されている。幅10cm程の外周溝に杭を打ち込み、生活時は埋っていた。北壁のカマドの裏にも回っている。床面はローム面を床としている。カマド前の不整形の穴は土層観察から床を何度も貼り替えたように思える。カマドは北壁にロームを主体に構築され煙道は縦狭間式に上方に伸び、当時の地表面から横に排出したと考えられる。土層断面の観察から壺掛け穴は径20cmである。また、並列式のカマドの可能性がある。

遺物(第12図、第4-1~4表、図版5)

遺物は土師器の壺、壺、壺の底部、須恵器の甕が出土している。

遺物番号	種別 器種	寸法 口径 器高・底径	胎土・焼成・色調	形状・技法などの特徴	出土位置 備考
3号住1	土師器 壺	口径 器高 底径 13.2 5.1 丸底	胎土：茶色粒子、細砂粒 微砂粒含む 焼成：良 色調：内 暗こげ茶褐色で部分的に黒く焦げている。 外 淡褐色で部分的にこげ茶褐色口辺が黒く焦げている。	体部外面上位に後があり口辺が直立して立ち上がる。外面は口辺部がヨコナデ、体部は4単位のヘラ削り、底部は一方向のナデ仕上げ。内面はヨコナデで内外面に漆を塗っている。	2/3残存

第4-1表 3号住居跡出土遺物(1)



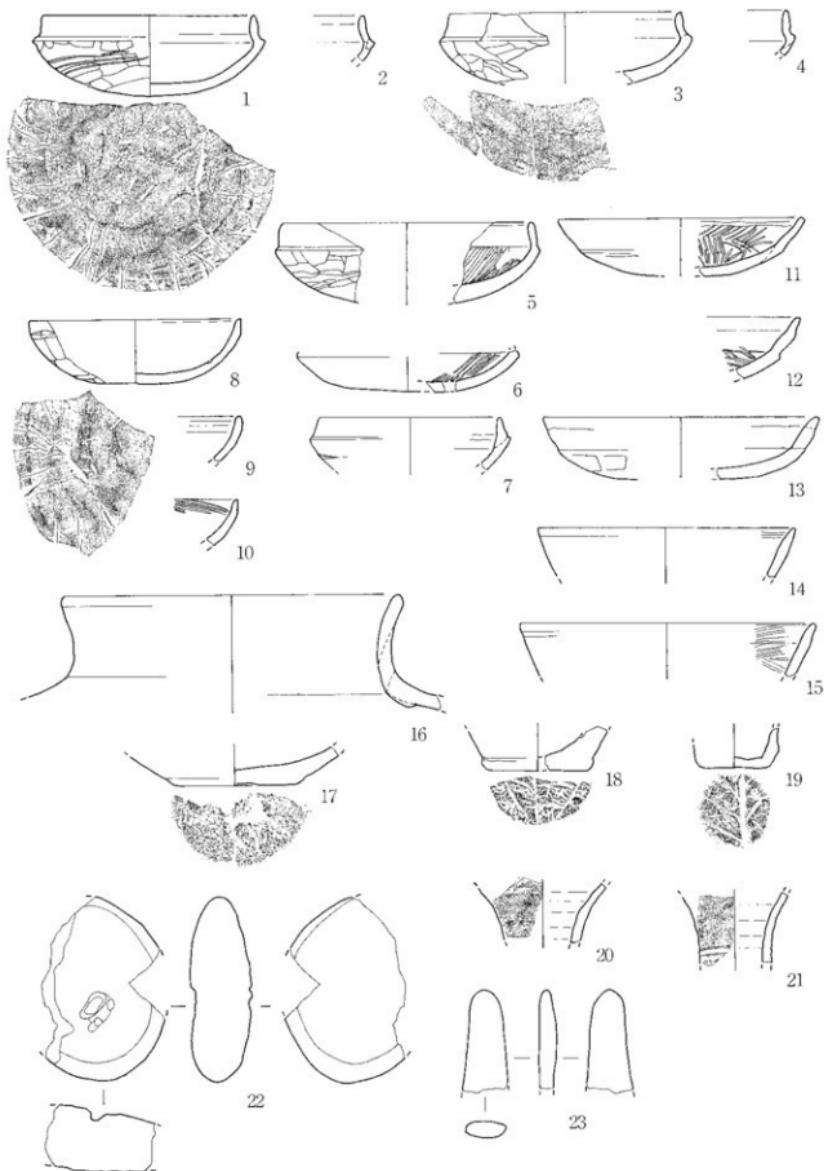
第11図 3号住居跡

遺物番号	種別 器	寸法 口径 器高・底径	胎土・焼成・色調	形状・技法などの特徴	出土位置 備考
3号住 2	土師器 壊	口径一 器高一 底径一	胎土 微砂粒、雲母含む 焼成 良 色調 茶褐色	体部外面上位に稜があり、口辺が崩曲して立ち上がる。口辺は外面がヨコナデ後ヘラナデ。内面はヘラナデ。 酸化焰焼成。	埋土 I辺小片 3と同一個体か?
3	土師器 壊	口径(13.3) 器高一 底径一	胎土 微砂粒、小石(2~3mm大)、粗砂粒、雲母含む 焼成 良 色調 内赤褐色 外淡赤褐色	体部外面上位に稜があり、口辺が崩曲して立ち上がる。外面は口辺がヨコナデ後ヘラナデ、体部がヘラ割り。内面は口辺がヨコナデ後ヘラナデ。 内面はヘラミガキ。酸化焰焼成。	埋土 体部～口辺 小片 2と同一個体か?
4	土師器 壊	口径一 器高一 底径一	胎土 小石(2~3mm大)、微砂粒、雲母含む 焼成 良 色調 淡茶褐色	体部外面上位にわずかに稜があり、口辺が直立して立ち上がる。口辺内外面はヨコナデ。 酸化焰焼成。	確認用 口辺小片
5	土師器 壊	口径(15.2) 器高(5.0) 底径一	胎土 白色粒子、微砂粒 雲母含む 焼成 良 色調 内灰茶褐色にこげ茶褐色 外赤褐色地に黒色	体部外面上位に稜があり、直立気味に丸みをもって立ち上がる。外面は口辺がヨコナデ、体部がヘラミガキ。内面は口辺がヨコナデ、体部が株状のヘラミガキ。外面部が塗り。	△残存
6	土師器 壊	口径一 器高一 底径一	胎土 粗砂粒、細砂粒含む 焼成 良 色調 内 黒色(黒色處理) 外 暗灰色、黒色	外面はヘラ削り、内面はヘラミガキ。内面黒色處理。外向黒斑。	11辺欠体部 △残存
7	土師器 壊	口径(11.2) 器高一 底径一	胎土 微砂粒、雲母含む 焼成 良 色調 内外 暗灰色で断面は灰白色	体部外面上位に稜があり、口辺が直立して立ち上がる。外面は口辺がヨコナデ、体部がヘラ削り。内面は口辺がヨコナデ、体部がヘラナデ。作りは稚。外面部が塗り。	埋土 小片

第4-2表 3号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別 器種	寸法 口径 器高・底径	胎土・焼成・色調	形状・技法などの特徴	出土位置 備考
3号住8	土師器 壊	口径 13.1 器高 4.0 底径 丸底	胎土 細砂粒、金雲母多く含み、 キラキラしている。 焼成 良 色調 内 赤褐色 外 赤茶褐色 内外面ともに部分的に 黒色物付着	外面は口辺部がヨコナデ、体部が ヘラ削り。内面はヨコナデ。内外 面漆塗りであるがとんでいる。	埋土 1/4残存
9	土師器 壊	口径 — 器高 — 底径 —	胎土 微砂粒含む 焼成 良 色調 内外 黒色	外面はヘラ削り、内面はヘラミガ キ。内外面漆塗り。	埋土 小片
10	土師器 壊	口径 — 器高 — 底径 —	胎土 石英(4mm大)、微砂粒、 雲母含む。 焼成 良 色調 茶褐色	外面はヘラナデ。内面は細いヘラ ミガキ。	埋土 小片
11	土師器 壊	口径 15.3 器高 — 底径 —	胎土 小石(1~3mm大)少數 微砂粒、石英含む。 焼成 良 色調 内 黑色(黒色処理) 外 淡褐色	体部外面上位にわずかに稜がある。 外面は口辺がヨコナデ。 体部がヘラ削り。内面はヘラミガ キで口辺と体部で方向が異なり、 口辺上位には4mm幅で横方向にヘ ラミガキ。内面黒色処理。外面酸 化焰焼成。	埋土 1/4残存
12	土師器 壊	口径 — 器高 — 底径 —	胎土 石英(2mm大)、微砂粒含む 焼成 良 色調 内外 黑色(黒色処理)	体部外面上位にわずかに稜があ り、口辺は崩曲して立ち上がる。 外面は口辺がヨコナデ、体部がヘ ラナデ、内面は口辺がヨコナデで、 下位はヨコナデ後にヘラミガキ、 体部はヘラミガキしている。	埋土 小片
13	土師器 壊	口径 (17.3) 器高 — 底径 —	胎土 雜砂粒、微砂粒含む 焼成 良 色調 内 黑色(黒色処理) 外 淡褐色で口辺部黒色	体部外面上位にわずかに稜があ り、口辺は崩曲して立ち上がる。 外面は口辺がヨコナデ、下位を ヨコナデ後にヘラミガキ、体部は ヘラ削り。内面はヘラミガキ。 外面酸化焰焼成。	埋土 小片
14	土師器 壊	口径 (16.1) 器高 — 底径 —	胎土 微砂粒少し含む 焼成 良 色調 内 黑色(黒色処理) 外 暗茶褐色	口辺外面がヨコナデ、内面はヘラ ミガキで、沈縫状に3本有。内面 黒色処理。外面漆塗りか。	確認用 小片
15	土師器 壊	口径 (18.3) 器高 — 底径 —	胎土 微砂粒少し含む 焼成 良 色調 内 黑色(黒色処理) 外 暗褐色で口辺部 黒色	外面は口辺がヨコナデ、体部がヘ ラナデ、内面はヘラミガキ。内面 黒色処理。外面黒斑。	埋土 小片
16	土師器 壊	口径 20.8 器高 — 底径 —	胎土 小石(3~6mm大)、粗 砂粒多く含む 焼成 良 色調 内外 暗褐色で断面 の中が黒色	粗作り。	埋土 小片
17	土師器 壊	口径 — 器高 — 底径 7.6	胎土 小石(2~5mm大)、金雲母、 粗砂粒含む 焼成 良 色調 内 暗褐色 外 暗茶褐色 底部 茶褐色	底部周辺がこすれている。	埋土 小片
18	土師器 壊	口径 — 器高 — 底径 (6.2)	胎土 細砂粒、微砂粒含む 焼成 良 色調 内 黒色 外 赤褐色		埋土 小片

第4-3表 3号住居跡出土遺物(3)



第12圖 3號住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	寸法 口径 器高・底径	胎土・焼成・色調	形狀・技法などの特徴	出土位置 備考
3号住19	手づくね 土器	口径 器高 底径 — — 4.2	胎土 微砂粒含む 焼成 良 内 黑色 外 茶褐色で体部が部分的に黒色	底部に木葉痕有。	埋土 口辺欠
20	須恵器 瓶		胎土 細砂粒、白色粒、雲母含む 焼成 良 色調 内外 暗灰色	内面ヨコナデ。外面にキザミ文様 2段有。 三輪窓の可能性有。	確認面 小片 21と同一個体か？
21	須恵器 甕		胎土 白色粒、微砂粒、石英粒 含む 焼成 良 色調 内外 暗灰色	内面ヨコナデ。外面にキザミ文様 有。 三輪窓の可能性有。	確認面 小片 20と同一個体か？
22	石製品 磨石	長 幅 厚 (11.4) (8.6) (3.8)	安山岩	火を受けている 凹の反対面が磨れている。	縦文
23	石製品 石棒		粘板岩	火を受けている 右棒の頭部片と思われる。	縦文

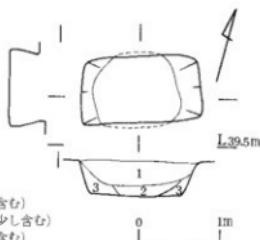
第4-1表 3号住居跡出土遺物（1）

第2項 土坑

1号土坑（第4-13図、図版3）

3号住居跡の西に確認した。平面形は東西15m、南北20.4mの長方形で、主軸方位は東西方向でE-17°-Nである。壁の立ち上りは東西方向は外傾し、南北方向は内傾している。深さは約40cmである。埋積土は褐色土でローム粒を多量に含んでいる。遺物は出土していない。

- 1 黒褐色土（3よりロームブロックを多く含む）
- 2 黒褐色土（ロームブロック、ローム粒を少し含む）
- 3 黒褐色土（ロームブロック、ローム粒を含む）

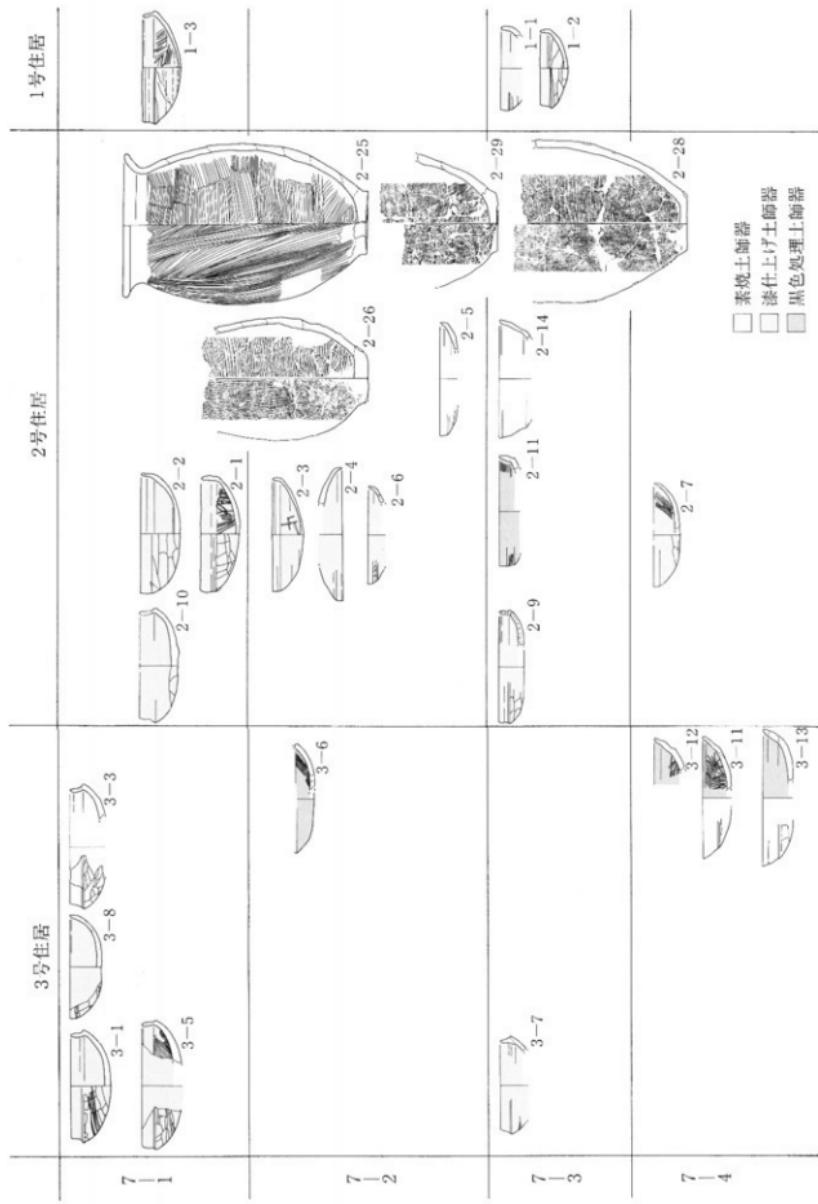


第13図 1号土坑

第3章まとめ

第14図は各住居跡出土の時期別組成で住居跡の帰属時期について考えてみるために、3軒の住居跡から出土した土師器を從来の土師器研究を参考に図示したものである。概略3号住居-2号住居-1号住居の変遷していると思われるが、同じ住居の中にかなりの年代幅の土器が含まれているようである。

3号住居跡の1・3・5は須恵器环身模倣の坏で丸底で深めである。1は内面ヨコナデ、外面ヘラミガキ、3は内面ヘラミガキ、外面ヘラ削り、5は内外面ヘラミガキである。8は須恵器蓋模倣の坏で丸底で环身模倣坏より浅く薄手に作られている。内面ヨコナデ、外面ヘラ削りである。6は口辺部を欠くが、浅く平底化し、内面ヘラミガキ、外面ヘラ削りである。7は口辺部片であるが小型化し、内面ヘラナデ、外面ヘラ削りである。12-11は口辺部が逆ハの字に開き中位に稜があり、底部は浅い丸底である。13はさらに平底化が進んだものである。これらは器面の処理によって塗り、炭素吸着による黒色処理、酸化焰焼成によるいわゆる素焼土器に分けられる。1・5・8・7は内外面漆仕上げ、3は素焼、6・12は内外面黒色処理、11・13は内面黒色処理、外面素焼である。さて、どの土器をもって帰属時期にするかであるが、1は大形片であるが床上23cmから、6は床面直上から出土している。5は床上13cmから、他は埋積土中からの出土である。これらのことから7世紀第1四半期後半から居住し、第2四半期中頃には廃棄したものと考えられる。また、12・11・13を見ると残存高30cmの住居が埋没するのに



第14図 各住居跡出土の時期別総成

50~60年を要したことになる。

2号住居跡の10・9・11は須恵器坏身模倣の坏で、10は内面ナデ、外面上半ヨコナデ、下半ヨコヘラ削り、9は内面ヨコナデ、外面ヘラナデ、11は内外面ミガキである。1~6は須恵器蓋模倣坏である。2・3はやや深めで、2は内面ヨコナデ、外面ヘラ削り、1は内面ヘラミガキ、外面ヘラ削りである。3~6は口縁部の形態が良く似ているもので、3は内面ヨコナデ後粗いヘラミガキ、外面はヘラナデ、4は蓋として実測し、内面ヨコナデ後棒状ミガキ、外面ヨコナデ、6は内面ヨコナデ、外面上位ヘラナデ、下位ヘラ削り、5は内面ヨコナデ、外面ヘラナデである。14は複合口縁坏で内外面ヨコナデである。7は浅い丸底坏で、内面ヘラミガキ、外面上位ヘラミガキ、下位ヘラ削りである。器面処理は1~4・6・7・9・10が内外面漆塗り、11は内外面黒色処理、5・14は素焼きである。出土位置は3・10が床面からで3は略定形、10は体部完形で口辺部を欠く。1・2は大形片であるが、1は床から21cm、2は床から52cm上から出土している。また、4~6は埋積上下層から、9・11・14は中層から、7は上層から出土している。1・2の時期ではなく10を伝世と考えると7世紀第2四半期と考えられる。25・29・28はハケ目整形甕で当地では類例が少ないと言われている。25はハケ目と言うよりは内外面クシ目整形である。29は内面ヘラナデ、外面クシ目整形、28は内面クシ目後ヨコヘラナデ、外面タテヘラ削りである。

1号住居跡の1~3は須恵器坏身模倣坏で3は内面ヘラミガキ、外面上半ヘラ削り、下半ヘラナデ、1は内外面ヘラミガキ、2は内面ヘラナデ、外面ヘラミガキである。器面処理は1~3とも内外面漆塗りで、出土位置は床面直上である。1・2の小型化した坏が本時期で3は伝世と思われ、本住居跡は7世紀第3四半期であろう。

出土した坏類の大半は器面処理が漆仕上げであった。また、須恵器蓋模倣坏については一部蓋として実測したが、蓋模倣坏の方が身模倣坏より概して薄く作られていることと、7世紀前半代の住居跡から身・蓋を含めて坏類の出土割合が多く、身と蓋が均等に出土する例が多く見られることから、この時期までは須恵器蓋身の組成そのままで使用された可能性がある。クシ目整形甕については、客観的に幅の狭いものをハケ目、やや広いものをクシ目とすると、クシ目整形甕は陸奥国と出羽国に、ハケ目整形甕は甲斐国、駿河国と越後国に見られるが、本遺跡出土のクシ日の圧痕が明瞭な例は出羽国に近いように思える。さらに3~11・12は陸奥国の中田式土器、2~14は北武藏の影響を受けた土器と思われる。

各住居内から出土した土器の坏には内面ミガキの素焼土器、内面ミガキの漆塗土器、内外面ミガキの漆塗土器、内面ミガキの黒色処理土器、内外面ミガキの黒色処理土器などが出土している。器形的にはいわゆる須恵器坏身模倣坏、須恵器蓋模倣坏と呼ばれるもので古墳時代終末期（鬼高Ⅲ期）の7世紀代の住居跡であった。住居跡の帰属時期は3号住居跡が7世紀第1四半期、2号住居跡が7世紀第2四半期、1号住居跡が7世紀第3四半期頃と推定される。

集落の繼続性を考えるならば本跡の住居などは古墳時代終末期ではなく、飛鳥時代の住居と考えた方が歴史的に捉えた場合、適確と思われる。土器は古墳時代の赤色土器から飛鳥時代（崇峻天皇5年[592]~和銅3年[710]）に黒色土器となるのである。地域によって差はあるものの黒色土器の出現は大きな歴史的意味を持っていると推察される。

那珂西遺跡の推定面積400,000m²の内わずか137m²（約0.03%）の調査であるが、今後のこの遺跡の保護、調査、解明の一助となることを期待し、終わりとする。

参考文献

- 皆川 修 「十方原遺跡」『茨城県教育財団文化財報告第179集 平成13年』
宮出和男 「十方原遺跡2」『茨城県教育財団文化財報告第193集 平成14年』
水島正泰 「鹿沼市船舟塚遺跡出土品の材質と技法」－古墳時代後期の、漆による表面仕上げを施した土器を中心に－『稻荷塚・大野原』栃木県教育委員会 第84集 1987
東国土器研究 第2号 若集 黒色土器ー出現と背景 東国土器研究会 1989
東国土器研究 第3号 若集 黒色土器ー展開と終焉 東国土器研究会 1990



A 那河西遺跡遠景（西より）



B 平面確認全景（南東より）



C 1号住居跡全景（南より）



D 1号住居跡 柱穴と遺物出土状態（北西より）



E 1号住居跡 貼床状況（西より）



F 2号住居跡 平面確認全景（東より）



G 2号住居跡 全景（南より）



H 2号住居跡 カマド右側土層（南東より）

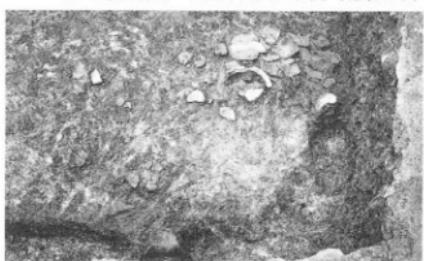
図版2



A 2号住居跡 南壁下出入口状段（北東より）



B 2号住居跡 カマド右側遺物出土状態（南より）



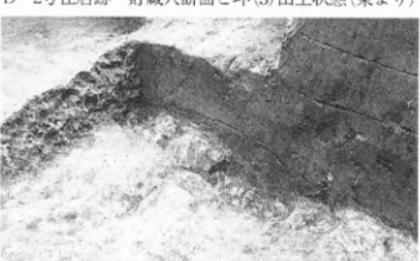
C 2号住居跡 北東隅遺物出土状態（東より）



D 2号住居跡 貯藏穴断面と壺(3)出土状態（東より）



E 2号住居跡 貼床状況（北東より）



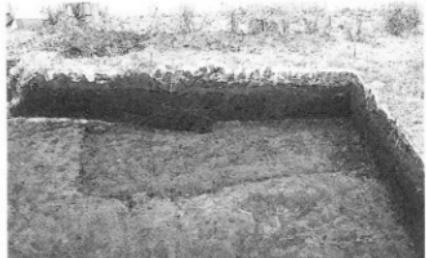
F 2号住居跡 出入口貼床（北東より）



G 3号住居跡 平面確認全景（西より）



H 3号住居跡全景（南より）



A 3号住居跡全景（西より）



B 3号住居跡 カマド土層断面・遺物出土状況（南西より）



C 3号住居跡 壁下小穴・遺物出土状況（北より）



D 3号住居跡 遺物出土状態（西より）



E 3号住居跡 カマド全掘（西より）



F 3号住居跡 貼床状況（南より）



G 1号土坑（北より）

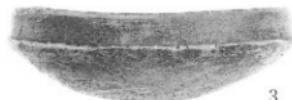


H 調査後全景（南東より）

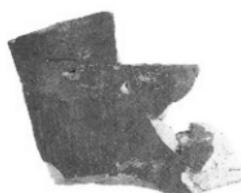
图版4



2



3



4



9

8



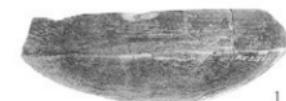
1



1号住居跡出土遺物



7



1



2



3



20



10



25



26

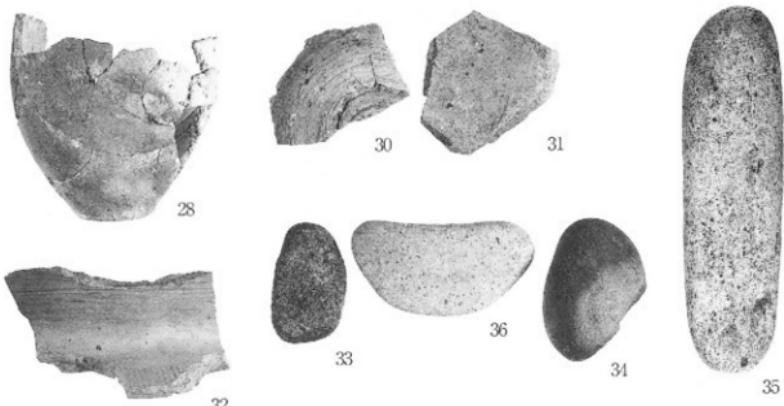


27

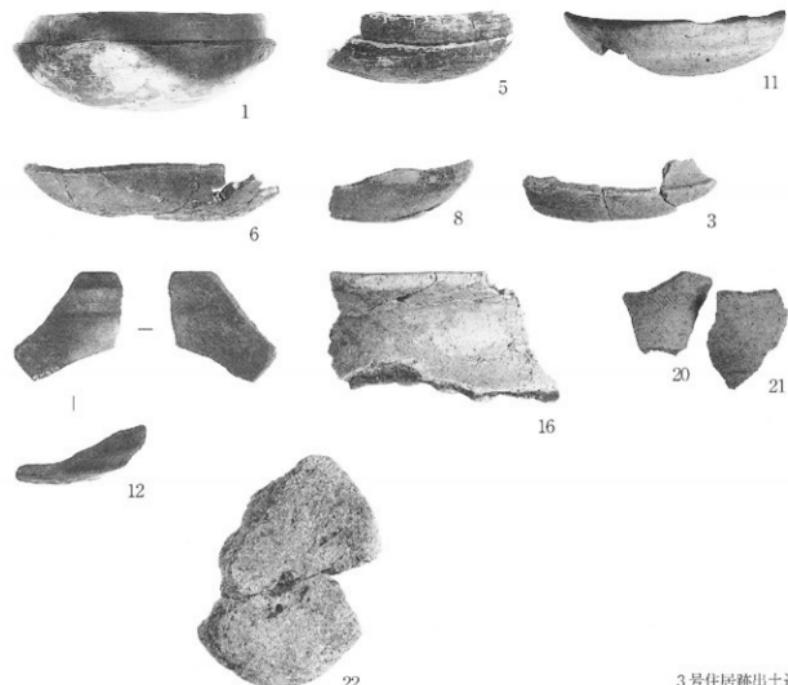


29

2号住居跡出土遺物（1）



2号住居跡出土遺物（2）



3号住居跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なかさいいせき						
書名	那珂西遺跡						
副書名							
シリーズ名	城里町埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第1集						
編著者名	河野一也 河野真理子						
編集機関	日本産業史研究所						
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡馬頭町小砂3112 TEL0287-93-0711						
発行機関	城里町教育委員会						
所在地	茨城県東茨城郡城里町下青山1-1						
発行年月日	西暦2005年（平成17年）9月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
なかさいいせきぐん 那珂西遺跡	しきとまちおおあざ 城里町大字 なかさいあざはなわ 那珂西字塙	08310	旧 001	36° 27' 34"	140° 24' 25"	20050513 ～ 20050526	173 民間住宅開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
那珂西遺跡	集落跡	古墳時代	住居跡 3軒 土坑 1口	土師器 壊、甕 須恵器 壊、蓋 壺、甕 石製品			

城里町埋蔵文化財調査報告 第1集

那 珂 西 遺 跡

発行 平成17年9月
 編集 日本産業史研究所
 著者 河野一也 河野真理子
 発行所 城里町教育委員会
 茨城県東茨城郡城里町下青山1-1
 TEL 029-288-3135
 印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
 栃木県宇都宮市陽東五丁目9番21号
 TEL 028-662-2511